

GUNMA
HOUSING
AWARD
2019

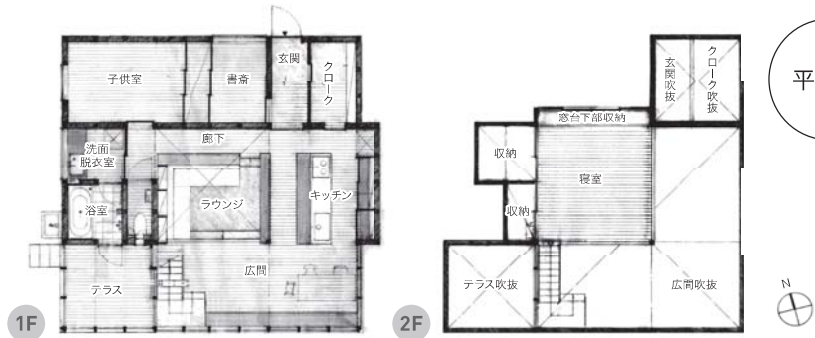
優良賞

ほしの家

〈ほしのいえ〉

設計者 浅見建築設計室 浅見俊幸+浅見千晴

施工者 狩野建築工房



平面図

CONCEPT

設計主旨

洞窟/大樹 ここは、設計者である私たち夫婦の友人の家です。世間的には25年来というそれなりに旧友の部類でしょうけれど、気持ちの中では高校生の頃と大して変わらない感覚でいたりするから不思議なものです。そんな彼らと最初の打合せで提示されたテーマは「あたたかく、開かれた家」でした。住宅として機能的、性能的な部分は必要十分なもので最も議論したのは、暮らしのシーンの中で感じられる落ち着いた「あたたか」な感覚と、個人住宅として外部に閉じ過ぎず暮らしの気配を街にも伝える作り方の模索でした。まずは敷地へ…渡良瀬川に掛かる橋を渡って敷地に建つ。1月の赤城山は、25年前と今も変わらず冬の冷たい風を吹き降ろしては隣のプロッコリー畑の土ぼこりを巻き上げていたし、道路の向こうに見える吾妻山も暗い緑と茶色のくすんだ色でした。そんな、この先も変わらないであろう風景を眺めることで、自分たちの場所を確かめる作業は、周辺を囲む街並み、山や川、木立や天体等と自分たちとの距離を感じる事でした。そんな太古から受け継がれている暮らしの本質の部分だけをなぞるような家に来ないだろうか。洞窟や岩陰で雨をしのぎ起居して、大樹に下で火を焚き、木に登っては梢の隙間から遠くを眺める。大切な家族や友と車座を囲み過

す静かな時間。言葉で説明の出来ない安らぎや温かさ。暮らしに必要な核は変わらないように思えました。特に機能は無いけど「ぼーっとできる場所」ってどんなだとい感じかな? 「窪み、なんかいいよね」という随分と堅穴式な友人の言葉に、広間に床を腰掛けられる高さ分掘下げ、堅穴式な大地の名残として床はモルタルで仕上げました。その場所に静けさを保つため「キッチン」や「洗面所」などの活動領域を周辺部に配置し、通路にならない様に配慮しながら、家族の動きが中央の窪み(淵み)に最終的に集約して行くようにしました。対して2階はソリーハウスのように 浮遊した場所とし、屋根を切った窓からは赤城山から吾妻山までの山並を望むことができます。材料は、なるべく地元で調達できる物を使用しました。群馬県産の木材を主に使用し、「窪み」の周囲の天井と壁には「きびそ」と呼ばれる蚕の繭の上層部で上質な絹糸でなく粗削りで素朴な糸を混ぜた漆喰を塗りました。蚕が繭を作るにあたり最初に吐き出す糸は、繭の外装を担う大切なシェルター材となるもので、半ば呪術的に忍ばせました。「きびそ」がこの空間に微妙な陰影を生むと共に、暮らしを包みこむ安心感が繭のように普遍的で確かなものであり続ける事を願っています。